

# 証言記録からみる学生生活史

## －広島大学における教員養成と教育学研究を振り返る－

研究代表者 山田 浩之（教育学コース）  
研究分担者 高橋 均（教職開発プログラム）  
草原 和博（社会系コース）  
永田 良太（日本語教育系コース）  
丸山 恭司（教育学コース）  
三時眞貴子（教育学コース）  
尾川 満宏（教育学コース）

### I 研究の背景と目的

本研究は、1902年に広島高等師範学校が設立されてから今日の広島大学教育学部に至るまでの、教育学を学ぶ学生たちの生活史を、種々の雑誌や記録に残された学生の証言記録と出身者へのインタビューから明らかにすることで、教育学を学ぶ学生が社会からどのように認識されてきたのか、また学生自身がそのことをどのように捉えてきたのか、そして教員養成と学問としての教育学が併存する状況の中で学生にどのような教育・研究指導が行われたのかの歴史の変遷を検討するものである。

大学が自身の責任において編纂・執筆する大学沿革史の作成は、世界中の大学で行われ続けている。大学沿革史は、個々の大学の歩みを理解することや各大学が行ってきた教育・研究実績を自ら世に問うことにとどまらず、その時々々の社会状況に応じて大学に何が求められたのか、大学がどのようなものとして理解され、機能していたのかなど、各国、各時代における大学の社会的役割と機能を考えるための材料を提供してくれる。日本においても戦後に新制大学が発足した1945年以降、現在に至るまで少なくとも4323冊（国立大学1234、公立大学138、私立大学2604、短期大学347）の大学沿革史が刊行されている（国内の学校沿革史を収集している野間教育研究所ホームページ <https://www.nomaken.jp/library/index.html> より。最終閲覧日2023年5月14日）。これらは概ね、制度史的な通史、資料集、写真集に大別される。最近では在学生向けの自校教育の教材や受験生向けの資料として用いるためにパンフレットや漫画といった形態をとるものもあるが、多くが周年記念事業の一環として出されるため、沿革や制度、組織形態に焦点を当てており、学生生活にまで踏み込んだものはあまりない。その数少ない事例が「専修大学の歴史」編集委員会『専修大学の歴史』平凡社、2009年であり、編集方針として「専修大学や学生、卒業生の歴史を日本近現代史の中にきちんと落とし込むこと」を採用している。

本研究も同様に学生の歴史を日本現代史の中にきちんと落とし込むことを目指すものであるが、単なる大学生の歴史を描こうとするものではない。教員養成の一翼を担ってきた広島大学教育学生の学生生活を描く本研究は、教師を目指す学生がどのような状況の中で育成されたのか、何を大学で経験し、その経験をどのように認識しているのかを示す、極めて貴重な研究となる。

さらに本研究は、教育学や教員養成が置かれた状況を学生目線で照射することで、教育学の歴史に新たな知見をもたらすことをもう一つの目的とする。

アメリカやイギリスなど各国で、近現代史の文脈に照らした教育学の社会史が描かれるようになってきている（マッカロック他 2023 を参照）が、日本ではいまだ断片的な研究にとどまっている。広島大学は、教員養成を切り離すことで学問的な立場を確立しようとしてきた旧帝大の教育学部とも、教員養成に特化することで各地の教員供給に貢献してきた地方国立大学教育学部とも異なり、教員養成と学問としての教育学の融合を図ろうと模索し続けてきた珍しい大学である。一方で、国や社会の未来を担う子どもたちの教育とそ  
ののための教員養成は重要な国家政策の一つとして、ますます関心を集めており、国際的には、教員養成と学問としての教育学を「一つの統一体」として作り上げていこうという動きが活発化している。長きにわたって教員養成と学問としての教育学の融合を自らの使命として併存させてきた広島大学の教育活動はこうしたこれからの教育学の在り方の一つのモデルを提供する可能性を秘めている。その意味でもそうした状況の中で学生がどのように生きたのか、その歴史的変遷を社会的文脈に照らしながら明らかにすることは極めて重要なことだと思われる。

（三時眞貴子\*）

## Ⅱ 戦前期の学生生活

### 1. 使用する資料

ここでとりあつかう『広島高師青春の日々』は著者である山根武氏が広島高等師範学校在学中につけた日記である。この日記は 1913(大正 2)年の元旦から 12 月まで、すなわち山根氏が在籍した 3 年次 3 学期から 4 年次 2 学期までの 1 年間にわたる貴重なものであり、その遺族によって公刊されている。なお、本章は山田(2006)で検討した内容の一部である。

### 2. 高等師範学校生の特徴

#### (1) フォーマルな学習

山根氏は 1892(明治 25)年 5 月、鳥取市に生まれた。生家は士族であり、義叔父は東京大学を卒業していた。1911 年(明治 44)年 3 月に鳥取中学校を卒業し、同年 4 月、広島高等師範学校の博物学部に入學した。

当時の広島高等師範学校は 1 年次が予科、2 年次から 4 年次が本科と分けられており、

表 1 広島高等師範学校予科の  
授業時間数 明治 42 年

学科目	毎週時数
倫理	1
国語	3
漢文	3
英語	10
数学	4
論理	2
図画	2
音楽	2
体操	3
計	30

『広島高等師範学校一覧』明治 42 年度により作成。

表 2 広島高等師範学校博物学部の授業時間数 明治 42 年

学科目	一年	二年	三年		
			一学期	二学期	三学期
倫理	2	2	3	2	
心理学・教育学	2	2	2	4	24
植物学	3	4	3	3	1
動物学	3	3	4	4	1
生理学・衛生	3				
鉱物学・地質学	2	2	4	3	
農学		3	3	3	
英語	5	4			
図画	2				
体操	3	3	2	2	
計	25	23	21	21	26

出所は表 1 に同じ。

予科では教養教育が、本科では専門教育が行われていた(表1、2)。表2からわかるように、本科での専門教育とは、それぞれの専攻領域が中心であった。博物学部ならば、博物学、すなわち「植物学」「動物学」などの教育にほとんどの時間が占められていた。その一方で、高等師範学校の特徴とされる「倫理学」「心理学・教育学」が占める比率はごくわずかなものにすぎなかった。ただし、本科3年次の3学期に「心理学・教育学」の授業時間が非常に多くなっているのは、この学期のほとんどが教育実習にあてられたためであった

5時40分起床、朝湯に浴し身を清め東天の明と月の光とにより読みぞめをす。植物にては、アルコール醗酵の歴史、動物にてはオリゴキータ、鉱物は化学の第1節、とむぶらうん在校記、アチツクフィロソファー各第1頁、大国民は本学期にはじむべき所を読む。

その後、1月8日に授業が始まると、学科の学習についての記述が頻繁に見られる。主なものだけでも、10日「8時半より談話室において鉱物の臨講をやる」、16日武術寒稽古で弓を「30分あまり引いて鉱物の勉強をやった。いや今日のは勉強ではなかった氣にむいたから研究したのだ」、19日「鉱物の今学期に習った所を訳して表とした」といった具合である。

このような日々の専門学科の学習に加え、博物学部では夏期に長期の実習が課されていた。それは、7月10日の終業式の翌日11日より24日まで愛媛県の興居島で行われた。この実習期間中は早朝から夜間まで1日中がプランクトン採集や数々の実験に費やされている。そのため、「我等には日曜は休息日にあらず一の実験日」(13日)であり、「いそがしくて日記などしるす間なし」(16日)というほどであった。さらに、実習後、帰省してからも、「朝から晩まで課題をやった」(8月6日)、「今日も課題のやり通した」(8月7日)と、宿題に追われていたのである。

こうした専門学科の学習を通じて、山根氏はその領域の専門家として幅広い知識を身につけていた。たとえば帰省した時、小学校に「旧師」を訪ねた際には、標本になっている貝の名を「尋ねられたが和名がわからない」が「学名ならば大抵知って居た」ため、「学名でお答へをした」(8月11日)。つまり、山根氏は広島高等師範学校でアカデミックに社会化されていたのである。

寺崎昌男は「高等師範学校自体の教育の構造と内容が、実は明治後期の段階にあつては「学問的」なものであった」とし、「この時期における高等師範学校の教育は、帝国大学、高等学校の教育と本質において異なるものではなかったといえるのではあるまいか」(寺崎1970)と指摘している。つまり、明治後期における高等師範学校と高校・帝国大学の教育は、ともに「学問的」なものであったのである。

むしろ、表1、表2に示した高等師範学校のカリキュラムからもわかるように、それは、旧制高校と帝国大学という長期の課程を4年間に短縮したものと捉えることができる。高等師範学校は教員の専門養成機関ではなく、「ミニ帝大」であった。

## (2) 帝国大学生との違い

その一方で、高等師範学校卒業者の性格は帝国大学卒業者と大きく異なるとされてきた。

例えば、ある教育雑誌では、帝国大学卒業者は紳士としての人格に優れ、知識も豊富であるが、他の学歴の者を見下しがちであり、教育の技術では劣っているという問題があるとされている。その一方で、高等師範学校卒業者は教員としての訓練はよくできているが、規矩準繩を墨守する性格であり、学閥主義がはなはだしいとされている。

実際に、山根氏の日記の中にも、高等師範学校生の特徴を示唆する記述が見られる。ある教師が高等師範学校生の欠点として「高等師範の生徒は先生からきいたことはみな筆記しやうとするカケ図もみなうつさうとする」(2月15日)と述べたことが記されている。また、別の教師は次のように述べたとされている。

高師生は習う所に於ては大学生にまさること多し。されどはやくソロバンをはじきて中学校ではこの本を200頁やればいゝなどとかんがへてしまふからよくない。又金のことを考へ出す。大学に行く人があるのは一面賀すべきだがこれを解釈すれば小学教員が金の問題より中学教員の検定試験をうけると同じである。とにかく学問を学問のためにやるべしなり。(7月21日)

表3 尊敬私淑する人物(上位10名まで)

帝大		官公私立高校		高師	
西郷隆盛	6.5	西郷隆盛	16.5	吉田松陰	21.7
野口英世	2.1	野口英世	7.8	西郷隆盛	12.3
乃木希典	1.8	楠木正成	6.3	楠木正成	8.4
吉田松陰	1.6	吉田松陰	5.5	乃木希典	6.8
楠木正成	1.5	乃木希典	4.1	野口英世	3.2
ゲーテ	1.4	ゲーテ	3.0	二宮尊徳	2.1
寺田寅彦	1.1	東郷平八郎	2.3	ペスタロッチ	1.8
ヒットラー	1.1	ヒットラー	2.2	ゲーテ	1.7
東郷平八郎	0.9	夏目漱石	1.8	宮本武蔵	1.2
パスツール	0.8	寺田寅彦	1.4	親鸞	1.1
計(人数)	9577	計(人数)	4868	計(人数)	725

文部省教学局『学生生徒生活調査』(下)、1938年により作成。

つまり高等師範学校生はまじめで、大学生(帝国大学生)に勝るほどの学習をしているが、教育のことも合理的に考えてしまう。また帝国大学進学者が多いのも昇進や昇給という欲得のためだというのである。

さらに帝国大学生と高等師範学校生の違いを示す資料もある。表3は1938(昭和13)年に行われた調査から各高等教育機関の学生・生徒が尊敬私淑する人物の順位である(教学局発行『学生生徒生活調査』(下)、1938年、182-183頁)。この表からわかるように、高等師範学校生でもっとも順位が高いのは吉田松陰であり、21.7%と非常に高い比率を示していた。同じ吉田松陰は、高校生や帝国大学生では4位にすぎず、しかもその比率は数パーセントであった。したがって高等師範学校と高校や帝国大学では、学生生徒文化に大きな差が生じていたことになる。

(山田浩之\*・丸山恭司・尾川満宏)

### Ⅲ 戦後の各講座ごとの様子

#### 1. 学習開発学講座

本項では、卒業生・修了生、在学生に15の項目を尋ねるインタビュー（日程の都合が合わない場合はアンケート）にご協力いただいた結果の一部を挙げながら「学習開発学」の学生生活史の概要について述べる。

1978年、教育学部（2学科7課程）は、教育学部（3学科）と学校教育学部（5課程）に改組された。1980年、学校教育学部に置かれた講座及び学科目の中の1つが学校教育講座であった。また、大学院学校教育研究科（修士課程）が設置された<sup>1</sup>。講座やゼミ等における大学教員との関わり・交流について充実しており、A教授（学校教育学部1978年度入学）によれば恩師について「端的な指導をして頂けて、私が疑問に思ったことは全て先生にお聞きしましたし、先生は全てに答えてくださったという意味で心から尊敬する人ですね。今でもそう思っています。ゼミでも尊敬の念を持っていますし、ゼミ以外でも人間として色々語り合ったり教えて頂いたりという交流があったと思っていますね。」ということである。また、B教授（学校教育学部1982年度入学）によれば、「研究室所属に際しては、高等学校までにはなかった学問分野である『教育学』を選択し、講座の先生方それぞれのお人柄とご専門の講義内容に魅力を感じておりました。ゼミ生は1学年3～4名で、主指導教員の研究室でお茶をいただきながら、楽しく学ばせていただきました。」ということである。

部活動・サークル等については、1995年に学校教育学部が東広島市統合移転地に移転を完了したが<sup>2</sup>、広島市南区東雲から東広島市へ移転後も引き継がれた部活動・サークル等もある。A教授によれば教育学部にある茶室もその1つである。

1997年、大学院教育学研究科に学習開発専攻（博士課程）が設置された<sup>3</sup>。2000年、教育学部及び学校教育学部を改組・再編し、新たに教育学部が設置された。設置された講座の1つが学習開発学であった。また、大学院教育学研究科及び大学院学校教育研究科が改組・再編され、新たに大学院教育学研究科（博士課程）が設置された。博士課程前期に設置された専攻の1つが学習科学専攻であり、博士課程後期に設置された専攻の1つが学習開発専攻であった<sup>4</sup>。学習科学専攻に学習開発基礎専修があり、学習開発専攻に学習開発基礎・支援分野があった。さらに、大学院については2016年に教育学研究科の改組・再編があり<sup>5</sup>、そして2020年に教育学研究科等が再編され、人間社会科学研究科が新設され<sup>6</sup>、教育科学専攻の教師教育デザイン学プログラムの中の基幹領域の1つが学習開発学領域となった<sup>7</sup>。学校教育学部・大学院学校教育研究科の頃に続いて、講座やゼミ等における大学教員との関わり・交流について充実していることが窺われる。大学院を修了後、小学校教諭になられたC教諭（教育学部2000年度入学）は「論文の書き方をゼロから教えていただきました。」「飲み会がよくあったと思います。」「よく先生の部屋でコーヒーをいただきました。」という思い出を持っている。大学院生のDさん（教育学部2016年度入学）によれば「研究相談で必要な時に応じて連絡を取ってミーティングをしてもらうことが多かったです。急にお願いしてもすぐに対応してくださって何でもかんでも聞いて研究させてもらうという感じでした。」ということである。また大学院生のEさん（教育学部2017年度入学）も「かなり仲良くさせてもらっていると思います。友達みたいに接していただいて、緊張しない関係なので研究の相談も気軽に行けるし、研究以外の悩みも相談したりアドバ



イスをいただいたり先生の相談に乗ったりしているので楽しい充実した関係かなと思います。」ということである。このように、大学教員とは研究はもちろんのことその他の関わり・交流もあり、学生は楽しさも感じていることが窺われる。このような風土が学校教員養成の伝統を支えるとともに、大学院博士課程後期が設置されて以降は大学教員の職に就く者のより順調な輩出に繋がっていると思われる。

(高橋 均\*)

## 2. 社会認識教育学講座

本節は、以下の教育組織を卒業し、本学の大学院に進学した5名の卒業生（表4に示すようにAからEの整理番号を振った）に行ったオンライン質問紙調査（Google Forms）の結果を報告する。5名の年齢は、2024年2月時点で、それぞれ30歳代・40歳代・50歳代・60歳代・70歳代以上に相当する。5名の回答を通して、それぞれの世代の学生生活の実態を予備的に捉えようとした。

- ・高等学校教員養成課程社会科専攻（1964年4月～1978年3月）
- ・教育学部教科教育学科社会科教育学専修（1978年4月～2000年3月）
- ・教育学部第二類社会系コース（2000年4月～）

本調査は、全部で12の質問項目を設定した。本節では、紙面の都合で自由記述回答の5項目の結果のみ提示する。質問項目は以下の6点である。

1. 学生生活全般の思い出
2. 自主サークルや勉強会への参加状況
3. 学生生活における娯楽
4. 学生生活における大学教員との関わり
5. 進路選択の要因
6. 大学院生としての生活

1については、ABがオリエンテーションキャンプやEキャンプを挙げたのに対して、Dはソフトボール大会への参加を、Eは専攻内同人誌の刊行を指摘した。2については、ABCはいずれも専門分野に係わる読書会等の経験を挙げているが、DEには特段の言及はない。3については、ABCが共通に友人との会食や歓談を指摘するに対して、DEは共通にソフトボール大会を挙げている。4について、ABCDEの5名は、いずれもゼミ指導の場が指導教員との中心的接点だったと述べる。ただし、Aはゼミ単位での「忘年会」や「コンパ」の思い出を語るのに対して、DFは「緊張した関わり」や「叱られながらの厳しい」指導を振り返っている。5については、回答は五者五様である。教育実習での苦い経験や教員になる自信の欠如を進学の原点に求めるACに対して、学部授業で得た知的刺激を挙げるB、大学教員を入学前から目指していたDや指導教員のすすめを契機とするEまで、経緯はいろいろである。6について、ABCは、院生室での学問的内容に留まらない対話や昼夜を問わず院生室で過ごした経験を共通に挙げるのに対して、DEは研究・執筆に没頭した経験や学会活動の支援等を記述している。

限定された属性の小さなサンプルから傾向性を述べるのは控えなくてはならないが、1990年代よりも前に学部を卒業したDEとそれより後に卒業したABCでは、研究生活や日常生活の語り口に違いがみられる（参考までに述べると、2000年に学校教育学部と教育

学部統合が、2001年に大学院重点化が行われた)。また質問項目の4と6の回答は、他に比べて相対的に多い。記述量とその人の記憶の厚さは相関していると仮説を立てるならば、5名の大学院進学者は、いずれも指導教員や同僚学生との間で、関係性に質的な違いこそあれ、濃密な関係を構築していたことがうかがえる。なお、DEの世代では「ソフトボール」が同期の紐帯となっていた点は注目されるべきであろう。このことは、男性卒業生が圧倒的多数を占める本教育組織のジェンダー的特性・文化の継承と密接に関係している可能性があることを示唆しておきたい。

表4 5名の質問紙調査への回答（下線は筆者）

整理番号	現在の年齢をお選びください。	1. 学生生活（特に学部生時代）で、とくに思い出に残ることがあれば、教えてください。	2. 自主サークル・勉強会等に参加していた場合、その内容について教えてください。	3. 学生生活でとくに楽しかったことは何ですか。どんなことをして遊んでいましたか。	4. 講座やゼミ等において、大学教員とはどのような関わり・交流を持っていましたか。	5. 進路選択（就職や進学等）の決め手は何でしたか。どのようにして進路を決めましたか。	6. （大学院に進学した方のみの質問です）大学院生活の思い出について教えてください。
A	30歳代	①教育学部のオリエンテーションキャンプ。②学生相談のボランティア活動。③教科教育系の講義。	同じ学科の先輩らとともに教科教育に関する読書会に参加した。社会科教育で著名なある研究者の専門書兼教育書を毎週1章ずつ担当者がレジュメを作成し、全員で議論した。	サークルやボランティア活動のメンバーと交流したこと。自家用車で県内各地や近隣県にドライブに行ったり、キャンパス周辺の飲食店を開拓したりしたこと。 <u>仲の良い友人らと会食や飲み会をしたこと。</u>	講座の新歓行事（オリエンテーション、新歓交流会等）や卒業関連行事（卒論成果報告会、進い出しコンパ等）など、1年で複数回にわたって講座の全教員と交流する機会があった。 <u>卒論ゼミでは3年生後期から卒業まで、毎週のゼミの時間で指導教員に研究指導をいただいた。卒論ゼミでの忘年会や新歓・進いコン等も行っていた。</u>	教育実習で自身の指導力に課題意識を持ち、より深く教科教育について学びたいという思いから進学を決めた。	先輩後輩のつながりが強く、研究や日常でのコミュニケーションが密で楽しかった。人数が増えて手狭な研究室の環境整備（清掃等）を熱心に行っていた。研究では徹夜することも多く、同じく夜型の友人と議論したり飲談したりすることも楽しい思い出として記憶している。
B	40歳代	1・2年生の際のEキャンプ。学部全員の縦割りでの参加で色々な人と会えたのが楽しかった。	大学3年生の夏休みに社会系コースの同級生たちと、デューイの『民主主義と教育』の読書会を行った。大学院になってからは、社会科教育の基礎文献を学部生と読む会を作り、週に1回集まっていた。	コースの同級生の誰かの家に行って、ご飯をみんなで作って、 <u>だから飲んで食べたりして、過ごしていた。</u>	授業やゼミでは指導・卒業論文の執筆指導が中心であった。後に科研費の共同研究プロジェクトなどに関わることになった。	学部3年の頃に受講した授業に知的刺激を受けた。特に自分の当たり前を揺さぶられた授業がとても好きだった。私も	四六時中研究室で過ごしていました。疲れた時に、自販機の前で院生の友達と話していたり、ジョギングしたりしていたのを覚えています。
C	50歳代	三年次の附属（皆実）の見学	文学部国史学の古文書を読む会（挫折しましたが）	友人宅での他愛もない話	0一年次からの持ち上がり、のチューターの先生には何かとお世話になった気がする。①四年次からのゼミでは担当教授の本を購読したような気がする（あまり覚えていない）、卒論テーマに関する指導・助言。②院試前には、関係する先生方に質問に行っていた	大学院への進学については、①モトリウム（学部3年の秋まで遊び回っていて、このまま教員になる自信がなかった）、②少し研究内容に面白みを感じるようになった	①研究内容に関する行き詰まり（研究に挫折したがいい経験になった）、②毎晩研究室で、みんなとウダウダ研究活動をやっていたこと
D	60歳代	全学のフェニックス・ソフトボール大会で優勝、準優勝、3位に輝いたこと。		学部4年間は社会科専攻の同級生で作ったソフトボールチーム「高社REDS」で毎日ソフトボールをしていた。	主任指導教員とは厳しい研究指導での緊張した関わりが大半であったが、就職の時にその先生からいただいた「あんたあ、私の指導による耐えぬいたねえ」の一言で、先生の思いを感じさせてもらった。	苦手だった理科を面白いと感じさせてくれた中3の時の米国物理教育プログラムとの出会いにより、暗記中心でない歴史教育ができる高校社会科教師をめざし、願わくばそのような教師を育てる大学教員、さらにそのような大学教員を育てる大学の教員を目指して広島大学を選んだ。	ゼミ並びに特別研究の準備、学会口頭発表並びに学会誌投稿に明け暮れていた記憶。
E	70歳代以上	専攻の仲間と専攻の機関誌である「ソキウス」「パピルス」発行したりしていた。	特になし	専攻（高社）のソフトボール大会、全学のソフトボール大会での優勝	コンパでの対話、叱られながらの厳しい卒論指導	指導教員の勧め	大学院では資料収集・研究三昧、学会の機関誌発行や大会開催の支援で研究者としての在り方を学ぶ、人生の伴侶とも出会う

（草原和博\*）

### 3. 日本語教育学講座

本節では、教育学部日本語教育学科（1986年4月～2000年3月）、教育学部第三類日本語教育系コース（2000年4月～）の卒業生8名を対象にしたアンケート調査結果にもとづいて、【進路】と【大学生活】という観点から傾向を捉えるための予備的考察を行う。2024年2月時点での回答者の年齢の内訳は30代が4名、40代が2名、50代が2名である。

#### 【進路】

進路に関して、回答者8名のうち3名が大学院（教育学研究科日本語教育学専修）に進学している。大学院進学理由としては、研究者になりたかった、日本語教師になって海

外で働くためには大学院に進学する必要があったなど、将来の職業を見すえた回答が得られた。大学院進学者の進路は大学教員2名、日本語教師1名である。大学教員の2名はいずれも日本語教育に関わる部署で勤務している。他方、学部卒業生の進路は一般企業3名、高校教員1名、公務員1名である。学部卒業生は幅広い職業に就いているのに対して、大学院進学者は日本語教育の専門性をより直接的に生かした職業に就いている。

どのように進路を決定したかについて、学部卒業生で公務員や高校教員になった者は地元に戻って就職したかった、一般就職者は就職活動をしながら自分のやりたいことが見つかったという回答が得られた。他方、大学院進学者で大学教員になった者も日本語教師になった者も、先に述べたように、入学した時からその職業に就く希望を持っていた。

### 【大学生生活】

回答者8名の全員が下宿をしており、自宅生や寮生は今回の調査対象者には見られなかった。部活やサークルに関しては全員が何らかの活動を行っていた。具体的には、8名中4名が文化系、2名が体育会系、2名が支援・ボランティア関係（日本語教育関係）の活動に携わっていた。

このうち、日本語教育の支援・ボランティア活動を行っていた2名は大学や日本語学校で日本語教育関係の仕事に就いている。日本語教育に関しては、学部時代の活動がその後の進路に関わっていることが伺われるが、2名とも、大学に入学した時から日本語教師になりたいという希望を持っていたという回答をしている。すなわち、大学入学時の希望が部活やサークル等の選択においても関わり、進路選択に結びついているということである。それ以外の進路選択に関して、公務員と高校教員からは「地元で就職したかった」、一般企業就職者からは「就職活動を行う中で会社を決めた」という声がそれぞれ聞かれた。

学部時代には全員がアルバイトを行っている。最も長く続けたアルバイトは塾講師が3名、飲食以外の接客業が3名、飲食業が2名であった。高校教員が同じ教育関係の塾講師を行っていた以外、最も長く続けたアルバイトの種類と進路との間には関係性が認められなかった。

学部時代の思い出に関しては、学科や学部、大学全体でのオリエンテーションキャンプを挙げた者が3名、卒業旅行が3名、部活の大会、海外での教育実習がそれぞれ1名であった。入学時や卒業時の出来事が特に思い出として残っていることがわかる。他方、学生生活で楽しかったことに関しては、友達と過ごした時間（食事やドライブ）が3名、卒業旅行が2名、部活の仲間と過ごした時間（大会や合宿）が2名、留学生とのパーティーが1名であり、在学中の時間から幅広く挙げられている。

（永田良太\*）

## 4. 教育学講座

教育学講座は文理科大学の教育学科を直接のルーツとするものであるが、以降、その組織構成については若干の変更はあるものの、大きく変わることなく現在まで続いている<sup>8</sup>。広島大学教育学部教育学科が設立されたのは、1949年の新制広島大学発足時であり、文理科大学教育学科教育学教室を母体に、広島高等師範学校の教育学担当教官を包摂して設置された。1953年の新制大学院制度発足と同時に、大学院教育学研究科教育学専攻・教育行政学専攻が設置され、それぞれの基礎となる講座が置かれた。教育学専攻を編成する講座



として、教育学第1講座（教育哲学）・教育学第2講座（日本東洋教育史）・教育学第3講座（西洋教育史）・教育学第4講座（教育社会学）・教育学第5講座（教育方法学）・教育学第6講座（教科教育第一）・教育学第7講座（教科教育第二）・教育学第8講座（教科教育第三）の8講座が、教育行政学専攻の講座として、教育学第9講座（教育行政学）・教育学第10講座（比較教育制度学）・教育学第11講座（学校教育及び社会教育）の3講座が置かれた。学校教育および社会教育講座は後に講座の通称を教育経営学と改めた。教育学専攻の基礎となる講座と位置づけられていた教科教育関係の講座は、教科教育学専攻がつくられた際、分離された。また社会教育学講座が教育経営学講座とは別に置かれることになった。その後の大講座制への以降、2000年の学校教育学部と教育学部の統合を経て、先の9講座（教育哲学、日本東洋教育史、西洋教育史、教育社会学、教育方法学、社会教育学、教育行財政学、比較国際教育学、教育経営学）を総称して教育学講座と呼んでいたが、現在は、これに幼児教育学を加えた10研究室を教育学教室と呼称している。教育組織としては、学部において10研究室を擁する教育学系コース、大学院は学部と同様の研究室を持つ教育学コースに高等教育学コースを加えた教育学プログラムを運営している。

教育学講座／教室（以下、教育学講座とする）は、設立当初より、一貫して研究者の養成を掲げて学部教育・大学院教育を行ってきた。今回、学部・大学院での学生生活の予備的調査として、大学院に進学し、大学教員となっている修了生8名へのアンケートをオンライン質問紙調査（Google Forms）で行った。アンケートの回答者8名の内、学部から教育学講座に所属した者が5名、大学院から所属した者が3名。2024年2月時点の年齢は60代1名、50代3名、40代4名となっている。

アンケートは学生生活（学部・大学院）について16項目行ったが、ここでは紙幅の関係上、大学院に進学した理由と教員とのかかわり、大学院時代の学びについて自由記述の結果を簡潔にまとめておく。

まず、大学院に進学した理由であるが、これは特に傾向といえるようなものはなかった。特に決めておらずなんとなく進学したという者が2名いる一方で、学生時代に読んだ本がとても興味深く研究をしてみたくなったという者や学部時代に教育学に興味を持って進学を希望したなど、積極的に研究したいと考えて入学した者が4名いた。残りの2名は他大学出身者であるが、学部時代に教育学講座出身の指導教官と相談する中で、大学院に進学することを決めたと答えており、教育学講座出身の他大学で大学教員をしている人が教え子を積極的に教育学講座に送り出している姿も垣間見えた。

大学院時代の指導教員とのかかわりについては、8名中6名が一緒に学会に参加したり、頻繁に飲みに行ったり、自宅に招待されるなど、公私にわたり、かかわりを持っていたことが分かった。

大学院時代の学びについて、7名が学内の先輩後輩との議論や他大学の人も交えた研究会での議論を通して学んでいたことを述べ、これが知的刺激を促し、学びを深めたと振り返っている。大学院ではとりわけ、授業よりもこうした非公式の学びの場での議論が極めて重要であることが改めて浮かび上がってきた。これが学部時代の学びとどのように違うのかを明らかにすることが今後の課題である。研究者の育成という一貫した目的を持ちながらも、状況も学生の意識も異なる学部教育と大学院教育において、それぞれの学びの体制をどのように整えていくのが課題となっている教育学講座のこれからを考えていくた

めにも、この点は重要な問題だと思われる。さらにまた、学生の学びの機会の獲得という点からだけではなく、学生時代に人的ネットワークがどのように形成されたのかを知るためにも、この知的刺激を促す非公式の学びの場にどのようにしてアクセスしたのかも重要な点だと思われるので、本調査ではこれらもクリアになる質問も取り入れたい。

(三時眞貴子\*)

## 注

- <sup>1</sup> 広島大学ウェブページ 沿革（年表）昭和 50 年～63 年（令和 6 年 3 月 10 日確認）  
[https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/1975\\_1988](https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/1975_1988)
- <sup>2</sup> 広島大学ウェブページ 沿革（年表）平成元年～9 年（令和 6 年 3 月 10 日確認）  
[https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/1989\\_1997](https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/1989_1997)
- <sup>3</sup> 同上
- <sup>4</sup> 広島大学ウェブページ 沿革（年表）平成 10 年～19 年（令和 6 年 3 月 10 日確認）  
[https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/1998\\_2007](https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/1998_2007)
- <sup>5</sup> 広島大学ウェブページ 沿革（年表）平成 20 年～31 年（令和 6 年 3 月 15 日確認）  
[https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/2008\\_2019](https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/2008_2019)
- <sup>6</sup> 広島大学ウェブページ 沿革（年表）令和元年～（令和 6 年 3 月 12 日確認）  
[https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/2019\\_2027](https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/about/history/history/2019_2027)
- <sup>7</sup> 広島大学ウェブページ 教師教育デザイン学プログラム（令和 6 年 3 月 12 日確認）  
<https://www.hiroshima-u.ac.jp/gshs/senkougakui/kyouikukagakusenkou/kyoushikyouikudezaingakup>
- <sup>8</sup> 広島大学教育学教室のウェブページ「教育学講座の歴史」（令和 6 年 3 月 12 日確認）  
<https://www.kyo2.hiroshima-u.ac.jp/history>

## 引用・参考文献

- 「専修大学の歴史」編集委員会 2009 『専修大学の歴史』平凡社。
- 寺崎昌男 1970 「中等学校の整備と中等教員の養成」中内敏夫・川合章『日本の教師 2 / 中・高教師のあゆみ』明治図書。
- マッカロック、ゲイリー他、小川佳万・三時眞貴子監訳 2023 『イギリス教育学の社会史 — 学問としての在り方をめぐる葛藤 —』昭和堂。
- 山田浩之 2006 「高等師範学校生のライフヒストリー — 戦前期日本における中等教員像の形成」松塚俊三・安原義仁編『国家・共同体・教師の戦略 — 教師の比較社会史』昭和堂。